

令和5年度入学式校長式辞

都城泉ヶ丘高校

春の暖かい陽気で、校内の樹木もすっかり芽吹き、希望に満ちあふれ、胸高鳴る今日の良き日保護者の皆様の御臨席のもと、宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校第78回、並びに、附属中学校第14回の令和5年度入学式を挙行できますことを、心よりお喜び申し上げます。これまでの式典は、新型コロナウイルス感染防止対策のためにいろいろな制約を受けてきました。全校生徒と教職員および入学生の保護者全員が一堂に会した形での入学式は実に4年ぶりとなります。新入生皆さんのご入学を在校生及び全職員で歓迎いたします。

本校は、明治32年に宮崎県立都城中学校として開校しました。その後昭和23年に学制改革により、県立都城泉ヶ丘高等学校が誕生し、平成16年には理数科が2クラス新設され、平成22年には都城泉ヶ丘高等学校附属中学校が設置されました。120年を超える歴史と伝統ある本校の卒業生は、地元はもとより国内外でめざましい活躍をされています。

先ほど本校への入学を許可しました、284名の高校生、40名の中学生の皆さん、御入学おめでとうございます。皆さんは難関の入学者選抜試験を見事に突破されました。不安と緊張でいっぱいかもしれませんが、合格したときの喜びを忘れず、先生方や先輩方とともに本校の新たな歴史や伝統を築いていってほしいと思います。保護者の皆様、高いところからではございますが、一言お祝い申し上げます。本日は誠にありがとうございます。

さて、皆さんは、何かの縁があって、ここに集まり、はじめての学校生活をスタートさせようとしています。そして、今日ここにいる皆さんの「今」は、自分の力だけで迎えることができたものではありません。保護者をはじめ、祖父母、恩師、友人、先輩・後輩などの、無数の「見えないけど、いくつものやさしい手」が添えられて今ここにいます。特に保護者は、幼い時から、皆さんを全力で支えてこられました。自分が多くの他者に支えられていることを実感するのは難しいのかもしれませんが、しかし、他者のおかげで、今、ここに自分が存在していることには、できるだけ早い時期に気付いて欲しいと思います。それに気付くことができれば、自然と、他者に対する「感謝や思いやり」の気持ちを兼ね備えた真の大人になっていけます。18才になれば法的には大人として認められますが、皆さんが真の大人になっていくには、これまで自分に添えられてきた「見えないけど、いくつものやさしい手」つまり、その「見えない手」を自覚していくことが大切です。そのためには、自分を客観的に、高いところから俯瞰して見るが必要になってきます。

室町時代初期の猿楽師（さるがくし）で、現代には観世流（かんぜりゅう）として受け継がれている能を大成させた世阿弥の「風姿花伝」に「離見の見」と「目前心後」という言葉が出てきます。まず、「離見の見」（離れて見る）とは、演じている者が、客席から自分の演じる姿を見る、つまり、観客の立場で自分自身を見よという意味です。実際には演じる自分の姿を自分で見ることはできませんが、例えば、学校生活の中で客観的に自分の行動を見てくれる友人などを持つことができれば、独りよがりの自分になることを避けることができます。次に「目前心後」（目は前、心は後ろ）という言葉の意味は、「目は前を見ていても、心は後ろにおいておけ」ということです。やはり、自分を客観的に、外側から見る努力が必要だということになります。世阿弥は後ろ姿を見る習慣がないと、その見えない後ろ姿に卑しさが出ていることに気づかない、それではいけないと教えてくれています。これからの学校生活で、皆さんが、「見えない手に気づき、感謝や思いやりを持った真の大人になっていく」こと、そして、今度は逆に「誰かを思いやり、誰かを支える見えない手の一つになっていく」ことに期待します。

最後になりますが、120年を超える長い歴史の中で、変わることなく受け継がれてきた本校の校風である「質実剛健」という精神を決して忘れることなく青春を謳歌してください。「質実剛健」を兼ね備えた人物とは、信念に基づき真面目に努力し、たとえ失敗してもそれを乗り越え、与えられたところで誠実で正直にこれからの時代を生き抜き、責任感が強く、信頼される人物のことです。

すべての新入生諸君が、この校風の中で、勉学にも部活動にも、そして学校行事にも全力で取り組むことで、新しい時代を主体的に切り拓いていく人材へと成長していくことを願って式辞といたします。

令和5年4月11日

宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校
宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校
校長 篠田 俊彦